

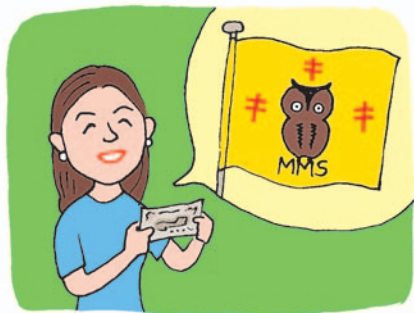
私が幼稚園の頃、父・北杜夫は上品で穏やかな毎日を過ごしていた。「ごきげんよう」と、家族で挨拶を交わしあうような家庭だった。ところが小学一年生の時、父が躁病になる。すると、家の雰囲気はガラリと一変した。

「俺様はチャーリー・チャップリンのようなユーモア溢れる映画を製作したい。そのためには映画の資金が何億も必要だから、今日から株の売買をする」と宣言し、証券会社四社と取引をはじめた。毎日、株の売買にあぐらあつという間に家からお金がなくなった。挙句の果てに出版社や、友人に借金を申し込むようになる。

母がそれを阻止しようとする、「遠藤周作さんの家を見ろ！ 阿川弘之さんの家を見ろ！ うちよりもっとひどいんだぞ！」と叫ぶ。「うちよりもっとひどい家だという阿川家で、佐和子さんは大丈夫だろうか？」と、いらぬ心配までした。

そして、我が家はついに夫婦別居、一時破産にまで至った。

昭和五十六年、父は再び躁病を発症し、日本の税金が高いことに異常なまでに立腹した。ちよんごその頃、畑正憲さんが「ムツゴロウ動物王国」を作ったのを耳にすると、父は「パパもこんな税金が高い日本から独立することにした。宇宙での最小国・マンボウマブゼ共和国を建国する」と言い出し、母に、「国旗を作っ



絵・江口修平

思い出の「マンボウマブゼ共和国」紙幣

齋藤由香

て欲しい」と頼んだ。母は毎日、証券会社への支払いに追われ疲弊していたので、「あなたが株を止めるなら作ってあげてもいい」と交換条件を出した。

すると父が「株はもうやらない」と言ったので、母は国旗を作ることになった。一メートル四方の大きな黄色の国旗には、父が好きなフクロウを可愛らしく刺繍して、何と徹夜で完成させたのである。

大喜びの父は、「よし、お金も作ろう！」とゴキゲンに拍車がかかった。父の父である歌人斎藤茂吉が、大正時代にヨーロッパ留学から持ち帰ったドイツ紙幣をまねて紙幣やコインを制作し始めた。

そして「文化の日」をまねて「文華の日」を設定し、文華勲章を遠藤周作先生、マブゼ賞を文芸評論家・奥野健男氏、加賀まりこさんには大悪魔賞を授与する。授賞式と園遊会は自宅庭で開催した。それには当時、日の出の勢いの写真週刊誌『フォーカス』まで取材にきた。

いま、久しぶりに「マンボウマブゼ共和国」の紙幣を見ると、表面にはベッドで寝転んでいる父の写真、裏面は谷内六郎さんのイラストが描かれている。単位は一マブゼ＝一円である。コインは一万マブゼ、紙幣は一万マブゼ、一〇万マブゼ、五〇万マブゼである。それは私にとって、お金に関する最も幸せな思い出である。

さいとう・ゆか ●サントリー窓際OL・エッセイスト。著書に、週刊新潮の連載をまとめた、『窓際OL トホホな朝ウフフの夜』、『窓際OL 親と上司は選べない』、祖父であり、歌人・斎藤茂吉の妻の生涯を描いた『猛女とよばれた淑女』、『VIVAは楽しい躁うつ病』等。日本中央競馬会運営審議会委員、やまがた特命観光・つや姫大使。

